

# 説明しながらメイクする—談話・非談話境界の相互作用—

## Talking through one's makeup: The interplay of discourse and non-discourse segment boundaries

天谷 晴香<sup>†</sup>  
Haruka Amatani

<sup>†</sup>東京大学  
The University of Tokyo  
amatani.haruka@gmail.com

### Abstract

When two or more activities are done successively, one should coordinate them naturally. In a make-up tutorial video, instruction and performance of a certain make-up are done at the same time. By segmenting discourse and non-discourse activities, we analyzed how those activities intersect one another. In one case, the instructor/performer detours from the main stream of instruction. The analysis shows how this detour was ceased with regard to alignment of the boundaries of discourse and non-discourse segments.

**Keywords** — **multiactivity, multimodality, discourse, gesture unit**

### 1. はじめに

マルチアクティビティーでは複数の活動が同時に行われる。[1]は、複数の活動がそれぞれ独立に行われるだけではなく、互いを挿入したり中断させたりしながら全体でひとつのマルチアクティビティーとして行われているとする。

本稿で分析対象とする「メイクのチュートリアル動画（メイク動画）」では、主に化粧の行程の教示と実演のふたつの活動が行われている。教示は談話行動と非談話行動によって構成される。教示を構成する談話行動は発話と発話に伴うジェスチャーがあり、非談話行動にはメイク道具を手を持って見せる身体動作がある。実演はメイクをするという非談話行動によって構成される。また、メイク動画では教示内容と関連しているが教示そのものではないエピソード・トークも談話行動として行われる。

これらの談話・非談話行動はどのようにお互い入り組んでマルチアクティビティーを形成しているか。談話・非談話を構造化して捉え、それぞれ

のユニット境界が互いにどのように入り組んでいるか傾向を探る。

### 2. データ分析

#### 2.1 データ

使用するデータは参与者 A(筆者)がカメラに向かって教示・実演を行ったメイク動画である。全体の長さは約 17 分で、今回分析したのは 11 分 30 秒から 14 分までの約 2 分 30 秒である。

#### 2.2 分析

##### 2.2.1 談話セグメント

本稿で対象にする談話ユニットは、[2]が「談話セグメント (discourse segment、以下 DS)」と呼んだまとまりである。ひとつの DS はひとつ以上の発話から形成される。談話全体はひとつの目的を持ち、DS は談話全体の目的を達するための個々の目的を持つ。

##### 2.2.2 非談話セグメントとしてのメイク動作ユニット

日常の動作を記述するのに確立されたシステムは少ない。[3]では、[4]のジェスチャー転記法を採用し食事動作の記述を行っている。本稿ではメイク動作を[4]のジェスチャー・ユニット/句/区間にならって、メイク動作ユニット/メイク動作句/メイク動作区間を階層的に記述する。本分析で注目するのは、メイク動作ユニットである。

メイク動作ユニットの例は「眉を描く」がある。これは「右眉を描く」「左眉を描く」のメイク句から成り立っている。DS に対応する非談話セグメ

ント(non-discourse segment、以下 NDS)を考える時、メイク・ユニットおよびメイク句を NDS とする。また NDS には、教示に伴う動作も含まれる。主に、メイク道具を見せる動作である。メイク動画においては、基本的に、教示に伴う動作と実行の動作が交互に行われる。

### 3. 結果

#### 3.1 談話／非談話セグメント境界の一致

メイク動画において、DS と NDS 境界が交差することは少なかった。2 分 30 秒間のデータ中、DS は 6 つあり NDS は 8 つで、境界が交差してのは 1 箇所のみだった。

#### 3.2 談話／非談話セグメント境界の交差

本分析で唯一、境界が交差した例について述べる。(1)では、DS1 の終了と DS2 の開始が NDS1 の途中で起きている。

(1) ...うんアイラインは{NDS1 (0.6)そんな感じ

(0.4) DS1]

[DS2 あけっこうアイライン命のつもりなんだけど(1.0)あんまり(1.0)h(0.4) DS2]

[DS3 あ(0.1)そう一時期アイライン命だったけど：今は：(0.5)なんかその：(0.4)アイブロウに(0.3)で：なんかマットな(0.2)マットな：粉：を：36 えーとアイブロウ n(0.13)えーとアイシャドウ(0.5)に：使うようになってから(2.5)なんていうかそれだけでけっこう目が(0.7)締まる感じがして締まった感じになっただけかなったのでそこまで(0.5)アイラインが(0.4)なきや絶対困るっていう感じじゃなくなっただけかも(2.0)おもしろいですね(0.5)進化ですね(0.7) DS3] NDS1}

[DS4 あ今{NDS2 塗ってるのはえっとワセリンです...

DS1 は「アイラインを描く難しさ」についての談話で、DS2 は「以前アイライン命だったこと」についての談話、DS3 「アイライン命じゃなくな

ったこと」についての談話である。(1)の開始前に A は「アイラインを描く」という NDS をすでに終えており、01A から始まる NDS1 は「リップバームを付ける」行程である。新たな行程が導入される前にその行程に関する教示が期待されるが、A はそのまま前行程の「アイライン」に関する談話を DS2、DS3 と続けており、DS3 は NDS1 終了まで続く。NDS2 は「リップバームの容器を見せる」という教示に伴う動作である。

### 4. 考察

3.2 節における分析では、参与者 A の発話内容がメイク行程の教示から雑談に変わり、暫くの後雑談から教示に復帰する様子が記述されている。

発話内容が教示から雑談に変わる点付近で、身体動作はひとつのメイク行程から次のメイク行程に写っている。ここで NDS1 が DS1 と DS2 の境界をいわばオーバーライドして開始しているのは、A が無意識的に NDS1 を開始してしまっているためであると考えられる。このことは A の姿勢がずっとカメラを向いたまま談話が続くことから推測される。NDS1 が本人に意識されるのは、一通りの NDS1 が終了した瞬間である。そこで A は「あ」という気づきを表す発話をして、NDS1 を始める前にされるべきだったと考えられる教示の発話 DS4 と教示に伴う動作 NDS2 を開始する。

DS と NDS の境界は接近して現れやすい。発話内容と教示／実行の動作が一致している場合に DS と NDS の境界が接近して現れることは想像に難くない。しかし興味深いことに、DS2-DS3 と NDS1 では、内容はすれ違っていないが終了境界が非常に近接している。ここではむしろ次の教示の発話と動作が必要になったため、これらの終了境界の一致が通常以上に顕著になったと考えられる。DS4 と NDS2 の開始点の時間差は 150ms と非常に短く、自然な流れで教示している時には現れにくい近接性の高さであると言えるだろう。

### 5. まとめ

本稿ではメイク動画における談話・非談話行動

を記述することで、マルチアクティビティーにおける談話／非談話セグメント境界の一致しやすさを見た。また、それらの境界の交差を見つけることで、参加者が無意識的に始めた行為を意識する過程を記述することができた。今後、分析を進め、これらの結果を一般化したい。

## 参考文献

- [1] Mondada, L., (2011) “The organization of concurrent courses of action in surgical demonstrations.”, in Streeck, J., Goodwin, C., and LeBaron, C. (eds), *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*, pp. 207-242. New York: Cambridge University Press.
- [2] Grosz, B. & Sidner, C., (1986) “Attention, intentions, and the structure of discourse.” *Computational Linguistics*, Vol.12, No.3, pp.175-204.
- [3] Den, Y. & Kowaki, T., (2012) “Annotation and preliminary analysis of eating activity in multi-party table talk.” in *Proceedings of the 8<sup>th</sup> Workshop on Multimodal Corpora: How should multimodal corpora deal with the situation?*, pp.30-33, Istanbul, Turkey.
- [4] Kendon, A., (2004) *Gesture: Visible Thought as Action*. Cambridge University Press: Cambridge U.K.